

【書評】

紅野謙介 『国語教育の危機——大学入学

共通テストと新学習指導要領』

（筑摩書房《ちくま新書》381 二〇一八年）

古田島洋介*

新たな「大学入学共通テスト」が二〇二一年一月に第一回、二〇二二年一月に第二回とマークシート方式で実施されてゐる。本稿がWeb上で公開されるころには、すでに二〇二三年一月を以て第三回が実施済みのことだらう。そこに至る事情や現状については、紅野謙介氏が本書に引き続き編集した『どうする？ どうなる？ これからの「国語」教育』（幻戯書房、二〇一九年）や本書の続篇とも称すべき『国語教育 混迷する改革』（筑摩書房《ちくま新書》488 二〇二〇年）などをお読みいただければよい。はるか格下の私には、か勉強で賢しら批評を加へるなぞ僭越にして失礼の骨頂だらう。

けれども、本書の或る一節についてだけは、どうしても訴へておきたいことがある。少々大げさに言へば、日本全国の国語科教員・高校生、そして誰よりも受験生に不正確な知識を広める虞があり、以て漢文教育廃止論者に附け入る隙を与へかねないからだ。本書が刊行されてから已に経ること四年餘、遅きに失したとはいへ、決して看過ごすわけにはゆかない。

一

本書の趣旨そのものに異議を差し挟むつもりは毫もない。産官主導のもと、国語屋たちが馳せ参じ、国語を小賢しくも「資料」操作の科目として扱ひ、その詩文を生意気にも「情報」と捉へて、あれやこれや図入り・表入り・写真入りの文章を賑々しく並べ立てる——限られた時間で解答を迫られる受験生にとつて、あたかも一分将棋よろしくの時間責めではないか。幸ひ、誰がどう見ても採点基準の設定と採点期間の回数に無理を来たす記述式問題は出題が見送られた。しかし、周知のごとく、いはゆる「センター入試」は二〇二〇年一月を最後として廃止、すでに

本書の第4章と第5章は、「大学入学共通テスト」を想定して二〇一七年十一月に実施された「試行調査（プレテスト）」の分析に当てられてゐる。第4章が「プレテストの分析1——記述式問題」、第5章が「プレテストの分析2——マークシート式問題」との構成だ。当該プレテストの「国語」は、約一千九百校から高校二年生以上の生徒約六万五千人が受検したとの由である（一五四頁）。その正答について主催者の大学入試センターが責を負ふことは言ふまでもない。また、その試験問題を分析して解説・批判を加へつつ正答を掲げた本書にも相応の責任があるはずだ。ただし、ここで述べるのは、本書の掲げた正答に異を唱へる性質の話柄ではない。正答の判断の仕方が腑に落ちないとの話である。

二

早速、本題に入らう。私の不審の焦点は、第5章「プレテストの分析2——マークシート式問題」中に記された第5問、すなはち太公望と太公望に関する「江戸」佐藤一斎の漢詩「太公垂釣図」とに係る。ただちに察せられるごとく、この第5問は漢文の問題で、まづ【文章Ⅰ】として「漢」司馬遷『史記』から太公望に関する一節を引く。次いで【文章Ⅱ】として高校二年生の一グループが一斎の漢詩「太公垂釣図」について調べた結果を掲げてをり、返り点・送り仮名付きの原詩に現代語訳を加へ、「江戸」狩野探幽「太公望釣浜図」をも添へて、一斎の漢詩が

【文章Ⅰ】の『史記』とは異なる太公望の姿を描き出していることを説明し、さらに「ヘコラム」で今や「太公望」が釣り人を指す語になつてゐることを述べる。そのうへで問1〜7を設けるといふ手の込んだ構成だ(二二七〜二四四頁)⁽³⁾。

もつとも、ここで取り上げるのは【文章Ⅱ】に関係する問5のみである。理解に資すべく、まづは【文章Ⅱ】のとほり、一斎の漢詩を返り点・送り仮名付きで掲げ、句ごとに添へられた現代語訳も引いておかう。

太公垂釣図
被^レ文王載得^レ帰^レ

佐藤一斎
不本意にも文王によって周に連れていかれてしまい、

一竿 風月与^レ心違^レ

釣り竿一本だけの風月という願いとは、異なることになってしまった。

想^ハ君牧野鷹揚^ノ後

想うに、あなたは牧野で武勇略を示し

夢在^ハ碓^ノ深^ニ 旧^ノ釣^ノ磯^ニ

て般を討伐した後は、
碓深の昔の釣磯を毎夜夢に見ていたこと
であろう。(二二九頁)

第二句の訳文「釣り竿一本だけの風月という願い」は、何やら熟さぬ不自然な日本語だが、今は問ふまい。この漢詩に関する肝腎の問5は、次のやうな設問である。

【文章Ⅱ】に挙げられた佐藤一斎の漢詩に関連した説明として正しいものを、次の①〜⑥のうちから、すべて選べ。(二四〇頁)

そして、選択肢①〜⑥が左のごとく示される。

- ① この詩は七言絶句という形式であり、第一、二、四句の末字で押韻している。
- ② この詩は七言律詩という形式であり、第一句と偶数句末で押韻し、また対句を構成している。
- ③ この詩は古体詩の七言詩であり、首聯、頷聯、頸聯、尾聯からなっている。
- ④ この詩のような作品は中国語の訓練を積んだごく一部の知識人しか作ることができず、漢詩は日本人の創作活動の一つにはならなかった。
- ⑤ この詩のような作品を詠むことができたのは、漢詩を日本独自の文学様式に変化させたからで、日本人は江戸時代末期から漢詩を作るようになった。

⑥ この詩のように優れた作品を日本人が多く残しているのは、古くから日本人が漢詩文に親しみ、自らの教養の基礎としてきたからである。(二四一頁)

さつと目を通しただけで、漢詩の格律すなはち詩形・押韻・対句・構成などに言及した①③と、日本人にとつての漢詩の在り方や歴史上の位置付けなどを述べた④⑥の二群に分かれることが見て取れよう。そして、設問の「正しいものを(中略)すべて選べ」との指示に鑑みれば、たぶん①③・④⑥のそれぞれから正しい記述を一つ選んで計二つの選択肢を答えれば正解になるはずだとの見当がつく。あくまで見当にすぎないが。

便宜上、後三者④⑥を先に片づけよう。紅野氏は次のやうに説明する。

④は漢詩が「日本人の創作活動の一つにはならなかった」と断定して、これはあり得ない。そんなことなら漢文をわざわざ「国語」で学習する必要もなくなりませう。またその始まりを「江戸時代末期」とした⑤も、明らかな誤答です。少なくとも漢文の基礎の基礎、なぜ漢文を習うのかという入り口を学んでいけば、正答の⑥にすぐにたどり着きます。つまり、④から⑥のなかでの選択はきわめて易しい。(二四二頁)

正答を⑥とする結論に異存はない。ただし、④と⑤を誤答とする理由の説明には些少の違和感を抱く。「漢詩は日本人の創作活動の一つにはならなかった」と断定する④について紅野氏自身が「これはあり得な

い」と断定してゐるが、④に謂ふ「日本人」は意味領域が甚だ曖昧である。これを「日本人一般」、さらには「女流文学者をも含む日本人一般」と解せば、漢詩が作れる男子の知識人は事実「ごく一部」にすぎなかつたであらうから、④とてあなたがち間違ひとは言ひ切れないまい。あるいは、「ごく一部の知識人」に掛かる修飾語「中国語の訓練を積んだ」が事実には反するのではないか、と言ふかもしれない。なるほど、律令制下の大学寮で学んだ学生や江戸時代の長崎通詞、そして「江戸」荻生徂徠の一派などを除けば、音声言語としての中国語を学んだ知識人は皆無に等しいだらう。けれども、書写言語としての中国語すなはち漢籍は、歴代の知識人がほぼ専一に取り組んだ学習の対象であつた。したがつて「中国語の訓練を積んだ」もまんざら誤りとは斬り捨てられないのである。紅野氏はいささか性急に「そんなことなら漢文をわざわざ「国語」で学習する必要もなくなります」と述べてゐるが、④が言及してゐるのは漢詩(韻文)であり、広義の漢文(散文+韻文)ではなく、ましてや狭義の漢文(散文)でもない。たしかに、漢詩(韻文)が「日本人の創作活動の一つ」であつたればこそ「国語」で漢文(広義+散文+韻文)を学ぶのだ、との論理は成り立つ。しかし、この論理にも実は大きな飛躍があり、「漢文訓読」なる媒介項を抜きにしては、つまり日本人が漢文すなはち古典中国語を日本語の文語に変換して享受してきた古来の「漢文訓読」といふ方法なしでは、漢詩を「国語」に引き入れることはできない。ただし、いざ「漢文訓読」を媒介として「日本人の創作活動の一つ」である漢詩を首尾よく「国語」に持ち込んだとしても、実際には内心忸怩たるを否めまい。高校の「国語」の、そのまた漢文の授業で、日本人の漢詩を「創作活動の一つ」として取り上げる餘裕など減多にありはしないからである。

要するに、④は、男子が己れの男子たる立場からのんべんだらりと読めば誤答になるものの、仔細に検討すれば「中国語」だの「日本人」だのと意味領域の曖昧な言葉が嵌め込まれた欠陥選択肢であり、場合によっては巷間に流行する gender 論の餌食にすらなりかねない代物なのである。欠陥選択肢ゆゑに、べもなく誤答とするのが最も適切な態度かもしれない。

日本人が漢詩を作り始めた時期を「江戸時代末期」とする⑤について、紅野氏はあつさり「明らかな誤答です」と記すだけである。想ふに、この⑤は【文章Ⅱ】中の字句「幕末の佐藤一斎（一七七一〜一八五九）」に基づく引っかけ問題なのだらう。「幕末」の語および一斎の没年「一八五九」を見て、得たり賢しとばかり「江戸時代末期」に飛びついたが最後、まんまと罠に嵌まるとの寸法だ。けれども、基礎的な知識を試す問題とはいへ、受験生に対して少し酷ではないかといふのが正直な感想である。実作品を一首も読まぬまま、『日本文学史』と銘打つ安直な参考書で「奈良時代は『懐風藻』、平安時代は勅撰三集・『本朝文粹』」などと丸暗記しただけの生徒が正解を得られるやうな出題そのものが疑問であるうへ、その種の知識を高校生に求めるのはそもそも無理だと考へるからである。ただでさへ疎んぜられてゐる漢文で、日本文学史もしくは日本漢詩史に関する問題を課すとは、ありていに言つて言語道断ではなからうか。大半の高校生にそこまでの餘裕はあるまい。むろん、多数の受験生が天神様にお参りして大学入試での合格を祈願する以上、当の祭神たる「平安」菅原道真が漢詩の名手であつたことくらゐは知つておいてほしい。しかし、それはあくまで教員側または出題者側の身勝手な希望にすぎず、必須の知識として生徒に押し売りするのは如何なものか。

平均的な学力の生徒にとつて、⑤は「明らかな誤答」ではないはずだ。ただ単に「奈良時代は『懐風藻』、平安時代は勅撰三集・『本朝文粹』」と丸暗記したにすぎない生徒が有利になるのでは、何よりも「センター試験」から「大学入学共通テスト」への「改革が獲得目標としたはずの「国語」を介した思考力・表現力・判断力をつける」（一四頁）との趣旨に反するのではないだらうか。

三

ここで選択肢の前三者①②③に立ちもどつてみよう。まづは紅野氏の説明を聴くこととする。「」内は、私（古田島）が補つた字句である。

③の「首聯・頷聯・頸聯・尾聯」というのは唐の時代に成立した律詩のルールで、「国語総合」の終盤に習う漢詩の句法です。（中略）律詩は八句から成りますが、この佐藤一斎の詩は四句だけです。四句は絶句の基本ですから、②のやうに「律詩と書いてあるのは間違いです。③に見える「聯」も律詩の句法で、わざと「七言詩」として律詩か絶句か分からないようにごまかして引っかけようとしています。③の「聯」は二句ずつで作られるものですから、「その聯」が③の記すやうに四つあるならば、合計八句になるはずで、どうしても四句はありえません。したがって、正答の一つは①です。ただし、絶句や律詩という漢詩の特性などについて十分な教育がなされているかは疑問です。まして「聯」などをあげているので、かなりくわしい漢文教育を受けているかどうかで正答率は大きく変わるでしょう。（二四一〜二四二頁）

末尾の「ただし」以下は、紅野氏が述べるとほりであらう。律詩の四つの聯の名称まで教へてゐる高校教員は少数派ではないかと懸念するうへ、たとひ教へてゐるとしても、総計十七画にも及ぶ「聯」字をきちんと板書してゐるかどうかが保証の限りではあるまい。異体字「聯」ならばまだしも、恣意に「連」で代用してみたり、現代中国語の簡体字を頼みに「联」と書いたりしてゐる教員さへ存在する可能性もある。そもそも「聯」は、常用漢字表に載つてゐない表外字だ。手荒な扱ひを受ける虞なしとしまし。もし「連」や「联」で記憶してゐる高校生がゐたとすれば、「聯」は別物にしか見えないだらう。

さらには、現に選択肢③が記してゐるごとく、「古体詩」なぞ持ち出して目眩ましにするなど、以ての外ではなからうか。現下の「国語」で、古体詩と近体詩の区別を説き、「聯」が近体詩に属する律詩の専用語だと体系的に教へてゐる教室が、果たして日本全国いくつあるだらうか。いや、高校の国語科教員自身、たとえば七言八句の漢詩を示されたとき、それが古体詩に属する古詩なのか、それとも近体詩に属する律詩なのか、自信を以て判別できるだけの知識を身につけてゐるだらうか。失礼ながら、いささか雲行きが怪しいのではないか。選択肢③には、別して出題者の独り善がりを感じざるを得ない。

それに比べると、②の誤答たるゆゑんは、はるかに質が好い。紅野氏が説明するごとく、四句から成る一齋の漢詩が「律詩」のはずはないからだ。基礎中の基礎たる知識であつさり誤答と判断できるだけに、何となく肩透かしを食らつたやうな気分になるけれども。たぶん②は、数を揃へるためだけに作つた捨て、選択肢なのだらう。

それにしても、と思ふ。紅野氏の説明中に記された「したがって、正

答の一つは①です」の「したがって」が私にはまつたく理解できない。

なぜ「したがって」なのだらうか。たしかに、設問に記された「すべて選べ」から、複数の正答があるものと見込みをつけ、前述のとほり六つの選択肢を①③と④⑥の二群に分けて、それぞれから一つの正答を選べばよいはずだと当て込めば、①③のうち、「律詩」とする②、四つの「聯」を掲げる③をいづれも誤答として排斥し、消去法を以て正答の①を手にすることはできる。事実、正答は①だ。けれども、消去法を用いることなく、①を積極的に正答とするには、それなりの確認・検証が必要ではないのか。正答が複数に及ぶものと決め込み、かつ①③のなかに一つは正答があるに違ひないと踏むやうな二重の当て推量と、右に記したごとき消去法との併用では、果たして解説と呼べるのか、疑問なしとしまし。設問の「すべて選べ」は、もしかすると底意地の悪い引っかけで、実は正答が一つだけといふこともあり得る。漢詩の形式に關する①③がすべて誤りとの可能性をただちに零とは踏み倒せまい。やはり正答①の正答たるゆゑんを述べなければ、解説として成り立たないだらう。

あるいは言ふかもしれないぬ、「一齋の漢詩は各句が七字であるから七言、一首全体が四句から成るので絶句、そして偶数句末すなはち第二・四句の末字で押韻するのはもちろんのこと、七言詩である以上、第一句で押韻するのは常識ではないか」と。加へて、さらに言ふかもしれない、「七言詩でありながら、第一句で押韻してゐなければ、いはゆる「踏み落とし」になつてしまふ。現に第一・二・四句の末字「帰・遠・磯」を音読みすれば「キ・イ・キ」となり、韻を踏んでゐるのは明らかで、それも常識に数へられるのではないか」と。なるほど、紅野氏も、そのやうな常識さへ踏まへれば正答と判断するのは容易、あれやこれや説明す

るまでもないかと考へて、あつさり「したがって、正答の一つは①です」と記したのかもしれない。けれども、その実、この常識は、御丁寧にも二段構への誤謬に基づく非常識にすぎないのである。このまま看過ごせば、不正確な知識が大手を振つて罷り通りかねない。以下、二つの誤謬を一つづつ排撃してゆかう。

四

第一は「七言詩では、偶数句末のみならず、第一句末でも必ず押韻する」との誤解である。実際は「七言詩では、偶数句末のみならず、第一句末でも押韻することが多い」にすぎず、「必ず押韻する」は誤つた知識である。論より証拠、次の有名な七絶を一瞥すればよい。

江南逢李龜年（江南にて李龜年に逢ふ）
〔唐〕杜甫
岐王宅裏尋常見 岐王の宅裏 尋常に見たり
崔九堂前幾度聞 崔九の堂前 幾度か聞けり
正是江南好風景 正是是れ江南の好風景
落花時節又逢君 落花の時節 又君に逢ふ

韻目・韻字は上平十二〔文〕韻「聞・君」。第一句末「見」は去声十七〔霰〕韻の仄字であるから、韻を踏んでゐない。たつたこれだけのことである。七言詩でも第一句が不押韻の作品は決して稀ではない。

「それでも」と言ふかもしれない、「七言詩で第一句に押韻しないのは、いはゆる「踏み落とし」ではないか」と。たしかに、七言詩の第一句が不押韻の場合は、「踏み落とし」と呼ぶ漢詩の解説書が多い。しかし

「踏み落とし」すなはち誤りといふわけではないのである。想ふに、第一句が不押韻の七言詩について言はれる「踏み落とし」とは、もと漢詩作りの初心者向けに使はれた用語ではなからうか。漢詩の作法を習ふとなれば、まづは七言絶句から始めるのが常道である。五言詩は一つひとつの語句の密度が濃いだけになかなかの難物、律詩は対句が要求されるのでこれまた難物のため、取り敢へずは七絶から手がけるのが無難といふわけだ。そのさい、差し当たり通例に従つて、七言詩では第一句も押韻するやう注意を促すべく、指導上の配慮から「踏み落とし」の語が用ゐられたのだらう。

ただし、すでに漢詩作りの学びがほとんど廃れた現在、誰が聞いても貶義に響く「踏み落とし」の語が独り歩きし、あたかも誤りであるかのごとく受け取られるやうになつてしまつた。これは甚だ不都合な事態である。なぜなら、詩法を説いた中国や台湾の書物で「踏み落とし」に相当する語を見かけたことがまつたくないからだ。日本人が七言詩の第一句不押韻を勝手に「踏み落とし」と名づけ、間違ひさながらに扱つてゐるにすぎないのではないか。かうした誤解を招く「踏み落とし」の語は、さつさとお払ひ箱にするに若くは莫しと考へる。

もつとも、「七言詩では、偶数句末のみならず、第一句末でも押韻することが多い」のは事実である。右に記したごとく、それが「通例」だと言つてもよい。例によつて「多い」だの「通例」だのと、人文科学は科学としては頼りないかぎりであるが、松尾善弘氏の調査によれば、『唐詩選』所収の百六十六首および『唐詩三百首』所収の六十首すなはち計二百二十六首の七絶のうち、第一句末も押韻する作品が九三%を占め、残りの七%が第一句末で押韻しない作品であるといふ⁽⁵⁾。念のため表に仕立てれば――

七言絶句	第一句	
	押韻	不押韻
	93%	7%

この比率が約四万九千首もの膨大な首数を収める『全唐詩』所載の七絶にも当てはまるか否かの判断は慎重を要するが、仮に一般的傾向と見れば、「七絶では、偶数句末のみならず、第一句末でも押韻する」と決めつけると、的中する確率は約九〇%に上るものの、外れる確率も約一〇%はあることになる。鉄火場でもあるまいに、受検生に確率の高いはうに賭けさせるなど、「大学入学共通テスト」に向けての「プレテスト」が奨めるべき行為ではなからう。

五

第二は「日本漢字音で読めば、押韻がわかる」との誤解である。設問の体裁を見れば察せられるとほり、一斎の漢詩で第四句「釣磯」に「てうき」と読み仮名を付けてゐるのは、「帰・違」と「磯」が韻を踏んでゐると理解させるためなのであらう。たしかに「帰・違・磯」すなはち「キ・イ・キ」／＼／＼／＼は、語頭子音を外せばいづれも／＼であるから、韻を踏んでゐるのだらうとの見当はつく。日本漢字音、殊に漢音が唐代の発音の面影をよく留めてゐることを思へば、このやうな見当の付け方もあながち間違ひとは言へない。「違」の字音仮名遣ひが「キ」であることを知つてゐる受検生がゐたとしても、たぶん結論は同じはずである。

実際、前に掲げた〔唐〕杜甫の七絶でも「聞・君」すなはち「ブン・クン」／＼／＼／＼は互ひに韻を踏む。日本漢字音による押韻の判断がある程度まで有効なのはたしかだらう。けれども、日本漢字音によつて押韻の見当をつけるのは、あくまで見当にとどまり、決定打にはならず、また決定打にはいけないのである。たとへば次の七絶だ。

蘇台覽古（蘇台覽古）	〔唐〕李白
旧苑荒台楊柳新	旧苑荒台楊柳新
菱歌清唱不勝春	菱歌清唱春に勝へず
只今惟有西江月	只今惟だ有り西江の月
會照吳王宮裏人	會て照らす吳王宮裏の人

これは仄起式・初句押韻の形式であり、韻目は上平十一（真）韻、韻字は「新・春・人」すなはち日本漢字音は「シン・シュン・ジン」／＼／＼／＼／＼である。必ず押韻してゐるはずの第二句末「春」の韻／＼／＼が他の二字の韻／＼／＼とは異なる。左の有名な七絶も同様だ。

楓橋夜泊（楓橋夜泊）	〔唐〕張繼
月落烏啼霜滿天	月落ち烏啼いて霜天に満つ
江楓漁火對愁眠	江楓漁火愁眠に對す
姑蘇城外寒山寺	姑蘇城外寒山寺
夜半鐘聲到客船	夜半の鐘聲客船に到る

これも仄起式・初句押韻の形式であり、韻目は下平一〈先〉韻、韻字は「天・眠・船」すなはち日本漢字音は「テン・ミン・セン」/ten min sen/である。やはり必ず押韻すべき第二句末「眠」の韻/ん/が他の二字の韻/ん/と異なる。日本漢字音によつて押韻を確定できないことは明らかだらう。

もつとも、右掲の二首において、それぞれ第二・四句末の「春・人」「眠・船」が韻を踏むことは押韻の規則によつて保証されてゐる以上、第一句末「新」「天」がおのの第四句末「人」「船」と同韻だとわかりさへすれば、結局は日本漢字音によつて韻字を見抜けることになるのではないか、と言ふ向きがあるかもしれない。しかし、これも甚だ危ふい話なのである。なぜなら、韻字の認定には、発音だけでなく、平仄も絡むからだ。その証拠には、次の詩――

石頭城（石頭城）	〔唐〕劉禹錫
山圍故國周遭在	山は故國を圍んで 周遭として在り
潮打空城寂寞回	潮は空城を打つて 寂寞として回る
淮水東邊旧時月	淮水東邊 旧時の月
夜深還過女牆來	夜深くして 還た女牆を過ぎて來たる

七言絶句だから、第二・四句のみならず、第一句も押韻してゐるものと決め込み、韻字は「在・回・來」のはずだと思つて音読みすれば「ザイ・カイ・ライ」/zai kai lai/となるので、めでたく一件落着と安心するかもしれない。しかし、事實は然らず。本詩も、前掲〔唐〕杜甫の七絶に同じく、実は第一句不押韻の形式で、上平十〈灰〉韻「回・來」に対し、第一句末「在」は上声十〈賄〉韻または去声十一〈隊〉韻の仄

字であるため、韻を踏んでゐるはずもない。なまじひに「回」の字音仮名遣ひ「クワイ」を知つてゐたりすると、三重母音/kwai/のゆゑを以て排斥、韻字は「在・來」だと錯覚してしまふ危険すらあるだらう。

日本漢字音による判断は、平仄を度外視してゐるので、甚だ頼りない性質のものであり、決して韻字を確定する手段にはなり得ない。せいぜい韻字かなと見当をつける程度の有効性しか持たないのである。まさか、一齋の七絶は属する字数が少ない上平五〈微〉韻を韻目としてゐるので、「帰・違・磯」くらゐの韻字は覚えておけ、といふわけではあるまい。「帰・違」は〈微〉韻の韻字として少なからず目にするものの、「磯」に出逢ふ機会は滅多にない。たしか「磯」は〈微〉韻のはずで、音符「幾」は「幾」の省略形だから、たぶん「幾」が共通する「磯」も〈微〉韻だらうと当て推量に及ぶのが関の山だ。

六

以上により、二段構への誤謬に基づく非常識の実態がおわかりいただけたのではないか。正答を①とする結論それ自体は動かない。しかし、それは①③に正答が一つは存在するはずだと前提に立ち、②と③が誤答であるがゆゑに、消去法によつて求められる正答にすぎず、①の正答たるゆゑを積極的に確認・検証した結果ではない。①が正答となるのは、「七言詩では第一句でも必ず押韻する」といふ誤つた決めつけと、「日本漢字音で発音すれば韻字がわかる」との誤つた思ひ込みがあればこそ話なのである。かうした二重の誤謬を犯しても、一齋の七絶がたまたま第一句押韻の形式で、韻字が日本漢字音でもたまたま韻を踏むために、たまたま正答①を手にする僥倖に恵まれたにすぎない。

第一句の末字「帰」も押韻してゐること、すなはち「帰・違・磯」がすべて上平五（微）韻に属する韻字であることは、最終的には漢和辞典で確認するしかないのである。そして、言ふまでもなく、受検生の手もとに漢和辞典などありはしない。たとひ漢和辞典の持ち込みが許されてゐたとしても、韻字を確定すべき韻目の調べ方を心得てゐる高校生が何人ゐるだらうか。「国語」の一分野にすぎない漢文で、そこまで指導してゐる高校の教室は皆無に違ひない。

端的に言へば、①を正答の一つとする本設問そのものが無理なのだ。こんな設問を「プレテスト」と銘打つて受検生に課すなど悪い冗談以外の何物でもない。本設問を通じて、「七言詩では第一句でも必ず押韻する」「日本漢字音で発音すれば韻字がわかる」との誤れる知識が日本全国に広まつたとすれば、いつたい誰が責任を取るのか。今さら大学入試センターが押つ取り刃で説明に及んだとて、時すでに遅し、大半の受検生が網目から漏れ、一生にわたり誤つた知識を抱へ続けることだらう。詳しい解説をほどこさぬまま「したがって、正答の一つは①です」で済ませた本書にも、その責任の一端くらは負つてもらはねばなるまい。

紅野氏によると、この設問について大学入試センターが発表した正答率は一四・七%の低きにとどまつたといふ（二四二頁）。①と⑥の複数解答となれば、どちらかで誤る可能性が高くなるのは必定、ましてや二重の誤謬に基づくしかない①が正答の一つと来ては、何をか況んやである。誤×誤×誤×正のごとき珍妙な二項演算を振り回されては、たまつたものではない。安直にも「絶句」の語だけに飛びついて①を選んだ生徒が有利になるやうな欠陥問題は、非難の的となつて然るべきではなからうか。

【注】

① 大学入試センターが、実際の大学入試に臨んだ「受験生」と区別すべく、プレテスト等の対象者を「受検生」と表記した流儀（二〇〇頁）に従う。

② 『史記』卷三十二「齊太公世家」冒頭の近くに見える名高い一節である。ただし、末尾の三字に見える送り仮名「立、為、師」（立ちて師と為す／二三八頁）は疑問で、正しくは「立、為、師」（立てて師と為す）ではないか。当該三字は、「周西伯（後の文王）が太公望を取り立てて師と仰いだ」意だからである。プレテストそれ自体の誤りか、それとも本書の誤植なのか、わざわざ調べてみる気にもならないが、いづれにせよ、自動詞の「立つ」（四段活用）と他動詞の「立つ」（下二段活用）を区別せぬ用意を送り仮名ではなからうか。

③ 紅野氏は、『文章Ⅰ』およびそれに関する問1〜4と『文章Ⅱ』およびそれに関する問5〜7とを分割して説明を加へてゐる。

④ やや性急の嫌ひがあり、選択肢の番号を記してゐない説明のため、今、明確さを重んじて「」内の字句を補つた。とりわけ、中途に見える「聯」は二句ずつで作られるものですから、どうしても四句はありえません。は言葉足らずの説明で、二句×二句四句のはずなのに、なぜ「どうしても四句はありえません」と言へるのか、字面のままでは附に落ちない読者も少なくないものと懸念する。

⑤ 松尾善弘『唐詩の解釈と鑑賞&平仄式と対句法』（近代文藝社、一九九三年）一五一頁。当書所収の論考七「踏み落し」考」中に示された百分率を簡略化した数字である。この論考はもと『九州中国学会報』第二十六卷（昭和六十二年（一九八七）五月）に掲載された由（一五七頁）であるが、文中、松尾氏は、標題のとほり「踏み落し」について詳細な検討を加へ、近体七言詩において本来の平仄式そのものが第一句末を仄字としてゐる型であれば、近体詩は平字で押韻するのが原則のため、その仄字たる末字が韻字とならないのは当然のことであり、それを「踏み落し」と呼ぶのは「妥当性を欠いたいいかたといわざるを得ない」（一五五〜一五六頁）と主張する。これは理に適つた見解であり、全面的に同意する。

ただし、松尾氏が続けて五言詩に言及し、『唐詩選』『唐詩三百首』の二書中、平仄式が第一句末を平字とする型でありながら、偶数句末すなはち第二・四句の末字と韻を踏まない唯一の例として、次の一首を挙げてる点には首をかしげざるを得ない。原詩の右傍に見える記号（○＝平声、●＝仄声、◎＝平声韻字）は、松尾氏自身が附けたものである。念のため、書き下し文も添へておかう。

怨情（怨情）
美人捲珠簾（唐）李白
美人珠簾を捲き

